

ミャンマーにおける障害者のエンパワメントと社会変容

～『エージェンシー』を成立させる支援についての考察～

横飛 裕子

研究の目的と方法：

本研究の目的は、ミャンマーにおける障害者支援を、より有効なものにするための手が見出すことである。そのため本稿では、ミャンマーにおける障害者支援のいくつかの事例を障害当事者のエージェンシーに焦点を当てて整理し、支援アプローチの効果および実施の際の課題、注意すべき点などについて明らかにする。

筆者は、ミャンマーにおいて NGO のプログラム現地責任者という立場で障害者支援事業に携わり、現在は別の立場から引き続きミャンマーにて障害者支援に携わっている。本稿は筆者がミャンマーで約 5 年間、障害問題に携わる中で書き溜めてきたノート、筆者が所属した NGO がミャンマーで運営する障害者のための職業訓練校で每期訓練生に対して実施した、卒業前質問票の回答を利用する。これが、障害当事者のエージェンシーを明らかにするための基礎的情報となる。

障害者をめぐる問題やその変化に関しては、ミャンマーのヤンゴン市で障害当事者や障害者支援従事者などに対して新たな聞き取りを行う。この際に、予め仮説を設定することはしない。なぜかという、一律に一方的に質問できるような内容ではなく、「聞き取るという営みの核心は、相手が私と語り合い、お互いをまなざすという濃密な時間をどのように生きるか、ということ」(佐藤 2002:120) といった相互作用を大切にしたいからである。こうして、質問表の枠に囚われない、仮説に縛られない調査が実施できると考えた。

「エージェンシー」などの基礎概念については文献研究を基に理論的な考察を行い、これを枠組みとして、上記の一次情報を「エージェントとしての障害当事者」および「変容」という切り口で分析した。

論文の構成：

第 1 章で本稿の背景・目的・方法・意義を説明した後、第 2 章で本稿の核となる概念の定義、実践例および既存アプローチの批判的検討、先行事例紹介を行う。ここでは、当事者に基礎づけられない支援の限界や、理論的には正しくても実践的な困難が伴うアプローチの問題を明らかにする。それらを踏まえて筆者の仮説を設定する。すなわち、「障害当事者を変革のエージェントとした障害当事者同士の交流の場、障害当事者・非当事者の交流の場をつくる支援によって、障害当事者のエンパワメントおよび社会変容を引き起こすことができる」というものである。第 3 章では、ミャンマーの政治的社会的状況および障害者の状況について説明し、本稿の舞台であるミャンマーの状況を明らかにする。第 4 章では、本稿の研究対象となる障害者支援を実施する国際および現地 NGO2 団体について紹介した後、それら団体による支援活動事例を記し、障害当事者を変革のエージェントとする支援の有効性について、キーパーソンへのインタビューを中心として分析する。第 5 章では、第 4 章で述べた事例を考察し、上述の仮説がどの程度検証されたかを明らかにする。その上で、今後のミャンマーにおける障害者支援への手掛かりを導き出す。最後に第 6 章では、本稿の結論をまとめ、将来の展望を述べる。

論文の概要：

昨今、障害配慮を開発のメインストリームにしていこうという動きが続けられ、各地それぞれの難しさを抱えながらも世界的な流れとして様々な試みがなされている。軍事政権による制限下にあるミャンマーにおいても、障害当事者を中心とする草の根の動きによって、障害者自身および障害者を取り巻く社会は少しではあるが確実に変化してきている。

今回の研究では、障害当事者を変革のエージェントとした支援の有効性を明らかにするため、ミャンマーの障害当事者や障害者支援従事者への聞き取りを数多く行った。ミャンマーにおける障害当事者を変革のエージェントとした「障害当事者同士の交流の場」や「障害当事者・非当事者の交流の場」をつくる支援によって、障害当事者のエンパワメントおよび社会変容が引き起こされるか否かについて調査したのである。

調査結果から、障害当事者を変革のエージェントとした支援により、障害当事者のエンパワメントが引き起こされていることが明らかになった。当事者の持つロールモデル性、当事者としての高いコミットメントなどにより、それらの変化が引き起こされたのである。また、社会変容については、大きな動きにはまだ結びついていないものの、障害当事者を変革のエージェントとした支援により、障害者と地域の人々の関係性の変容や障害者および周囲の人々の意識変容などが見られ、今後支援活動を継続していく中で更なる変容が引き起こされることが期待されている。

もともと、障害者支援は、障害当事者を変革のエージェントとし、障害当事者が活躍できる場を作り出せばよいという単純なものではないことも浮かび上がった。障害当事者の強みを強調しすぎるがために障害者と障害非当事者を二分法的に対置する見方が強まってしまったり、変革のエージェントとしての活躍が期待される障害当事者自身に障害関連知識や障害問題の理解が不足しているなどといった現状を軽視することはできない。

本研究では、障害者をチャリティーの対象とするのではなく、障害当事者のエージェンシーが成立するように障害者支援を計画・実施する必要性があることが明らかになった。一方、これらの支援が引き続き実施されることに加えて、より有効な支援のために、障害当事者の育成支援や、政策および開発団体に対する障害メインストリーミングへの働きかけなどといった活動も重要である。多角的な活動によって、ミャンマーの障害者の状況は大きく改善されていくと考える。

軍事政権下という特殊な状況にあり、海外に伝わる情報は否定的な政治関連報道が中心となっているミャンマーという国について、外に伝えられていない障害者の現状と草の根障害者支援の動きを、障害当事者のエージェンシーという切り口でまとめたことにより、本稿が、今後のミャンマーにおける障害者支援の参考とされることが期待される。